

「真宗儀式の教相 得度式をめぐる」

講師：竹橋 太氏（真宗大谷派儀式指導研究所 研究員）／ 2021 年 12 月 1 日開講

※名古屋教区教化センター主催公開講座「真宗儀式の教相 得度式をめぐる」を担当スタッフがデータ化したものに竹橋太氏に手を加えていただきました。

『真宗大谷派名古屋教区教化センター研究報告 第 13 集』（2022 年 6 月発行）に掲載したものです。

コロナウイルスと人間

新型コロナウイルスの感染対策で外出の自粛が言われてきましたが、近頃は感染者もぐっと減って状況が変わってきました。それで「もう大丈夫だろう」と考えて外出される人もいます。一時期に比べて、京都も観光客が増えています。一方で、そういう外出を批判的に考える人もいますし、中にはワクチンそのものを否定的に考える人もいます。そうすると「どうしてあの人たちは…」「自分は我慢しているのに…」という気持ちが出てきて腹が立ち、そうして至る所で分断が生じます。そういった分断を望んでいるわけではないのですが、こういう非常事態になるとどうしても、善と悪を決めたくなる。そのうえで「自分は正しいんだ」といつでも言いたい、それが人間というものだと思います。

これはよく聞いてほしいのですが、間違っているだろう人に対し腹が立つことと、「あの人は間違っている」と言うこととは、全く関係の無いことです。普段の生活を考えても、腹が立つということと、相手が自分に不利益なことをしたということとは直結しません。同じことをされても、相手が誰かによって怒ったり怒らなかったりするでしょう。ということは、怒らざるをえないようなものが、言い換えれば絶対に正当化できないようなものが、我々の心の中にあるということが問題なのです。怒らなければいいじゃないですか、争わなければいいじゃないですか、そんなことは分かりきったことです。そうでありながらも、どうして争いが起こるのか。そういう方向で考えなければ結局、自分の考えに賛成の人は善、反対の人は悪ということにしかありません。

新型コロナウイルスの感染拡大のようなことが社会で起きると、人間はついつい、「これは善、これは悪」と分けて生きることによって自分で自分を苦しめ、それで鬱々とした気持ちが続くのだと思います。目の前が晴れないからこそ、短絡的にどっちか一方を切り捨てて正しい方を決めたくなる。それが今の社会ですし、我々人間はそういったものを抱えているということなのです。

引き裂かれた「わたし」

他の人に対して、我々は善悪を分けて考えて分断していくということを言いましたが、自分自身に対してもそうです。「思い通りにならない自分のここは嫌い、ここは悪い」ということはありませんか？ 自分のことが大好きだという人は、あまりこういう場所には来ないと思うんですよね。自分が認められないとか、生きていることに息苦しさを感ずるとか、そういうことがあるか

ら仏法を聞きたいという気持ちになるのかなと思います。そこには、自分で自分を見ている、ということがあります。資料をご覧ください。私があるところに書いたものです。

人間であるということは、自らがヒキサカレ、その片方が正しさや善を主張し、もう一方を評価する、つまり「ミステル」という構造になっている、ということである。これはどうにもならない事実である。他の人に対しても同様。だから一切皆苦なのである。

（「ワタシタチハヒキサカレテイル」）

自転車に乗って転んだことはありますか？ その時、最初にするのが、周りに他人がいないか確認することでしょう。見られたら恥ずかしい。しかし見られていなくても、自分は恥ずかしいことをしたと顔が赤くなります。つまり我々は、世の中の他人の目を自分の中に持っているのです。それが善と悪の基本です。

世の中のたくさんの人が善いと思っていることを、自分はできるかどうか。世の中のたくさんの人から見たら恥ずかしいことを、自分はしているのかどうか。見ている自分と見られている自分というように、自分の中に二人の自分がいる。そういう分断が自分の中で起こっているのです。

このように、善悪で判断して自分を見ていくという構造は、修行で無くせるものではありません。人間は基本的にそうなっているのです。そうなっているからこそ、人間はダメなものを良くしていくよう進歩し、自分たちの足りないところを補うために科学が発達しました。そのこと自体は悪いことではありませんが、それと全く同じ構造（視点）で自分自身を見た時、自分自身の中に受け入れられないものがある。もちろん、その受け入れられないものを直すように努力することも大切です。しかし、どうにもならないこともある。

その代表として、お釈迦さまは「老病死」の苦を説かれているわけです。老病死は自分の身に起こることでありながら、自分では認められない、自分と切り離したいものです。そうして、見る自分が自分を裁き、受け入れられないものとなる。そこには一つの分断があるのです。

他にも、自分が生きるうえでいろいろなことがあります。他人に侮られたくない、立派な人間に見られたい、そういう名誉欲を人間は根深く持っています。その望みが叶っていればいいのですが、叶わなくなったら本当に辛い。だから修行して、そういう欲を捨てようと考えたりするわけです。そういった分断があるからこそ、人間は自分自身が生きていることをなかなか受け取れない。資料にはそのことが「だから一切皆苦なのである」とあります。人間は構造上、そういうふうに出来上がっているのです。資料の続きをご覧ください。

仏教の学びは、その「引き裂かれている構造そのもの」を問題にするのであるが、それを考えるという行為そのものが、その引き裂かれた構造のなかで行われてしまう。つまり、自らが引き裂かれている事実を外から眺めることによって、「その事実（引き裂かれてしまっている私そのもののあり方）」と「それを見る私」という分裂が起きて、引き裂かれた状態が再生産されてしまう。ソコカラデラレナイノダ。（「ワタシタチハヒキサカレテイル」）

自分で自分を見るという人間の分別の構造、これが「無明」だと言えるでしょう。ダメな部分

を直せばいいんだと、見ている自分は思う。しかし、ダメな自分を直す自分を、また別の自分が同じように直す、その繰り返しです。より良く生きようという方向性みたいなものが、人間の中には最初から存在している。自分の思いでどうにかなる問題ではないのです。だから自分自身が分断されて苦しむ。そういうことを、お釈迦さまは「無明」と言われたのです。しかしそうになると「では、その無明（分断）の構造を修行して直そう」となるのですが、その試み自体が無明の構造なのです。

仏教では「卑下慢」という言葉があります。「卑下」とは「自分はダメだ、愚か者だ」と考えること。「慢」は思い上がりということです。この「卑下慢」の反対が「増上慢」、つまり「自分は立派なものだ」と思いあがることです。仏教では「自分はダメだ」というのも思い上がりだと言うのです。それはなぜか。すでに言ったように、自分自身は、見る自分と見られる自分との二つに分かれている。つまり「ダメだ」と言っているのもやはり自分なのです。

例えば「私は凡夫だから何も分かりません」というようなことを言ったことはありませんか？こんなことは本当は言えないのです。凡夫というのは自分で決められることではなく、仏さまに言われることなのです。「私は凡夫だから」と言うならば、それを言う自分は仏さまの立場にいる。「自分はダメだ」と判断している自分は、正しいところに立ってしまっているのです。だから「卑下慢」と言われるのです。

でも恐らく、そういう構造があるから、我々はなんとか暮らしていけるのだとも思います。本当に突き詰めて、ずっと「自分は愚かだ」というところで生きるとは困難を極めると思います。「自分はダメだ」ということを分かっている別の私が存在することによって、なんとか自分を保とうとしている。そういう危うさを我々の中に感じるのですが、皆さんはどうでしょうか。こういったことが「無明」であり、「流転」などと説かれることの内容だと思います。

「縁起」の意味

そういう構造そのものも実に縁起したものであって、私自身には「本来の私」と呼べるようなものはなにもないのである。ところが我々は、「いのちがかかわり合っている」、「人間も自然の一部である」と、いのちといのち、自然と人間といった存在しているもの同士の関係を縁起と考えてしまう。ここにはまた、存在とそれを了解しようとする（見ている）者という分裂が生じている。

（「ワタシタチハヒキサカレテイル」）

我々のご縁をいただいて、今こうしてここにいます。本日の講師として私を呼んでくださったから私はここにいられるし、呼んでくださっても皆さんが来なかったならば、私は話ができません。私が来て話しているのではなく、皆さんの前で話をしている私がいるんです。言い換えれば、“わたし”がいて、皆さんの前で話をしているということではありません。仏教的に言えば、皆さんの前でお話をしているのが“わたし”であり、そういうご縁が“わたし”になっているということです。

「ご縁をいただいております」という言葉を聞きますが、ご縁はいただくものではありません。ご縁をいただくという言い方は「自分がいる」ということが前提になっています。その時にいただいているご縁は善いものだけでしょう。結婚しなかった、病気になった、そういった全てのご縁が“わたし”となっているのであり、ご縁をいただいている誰かがいるわけではないのです。

もちろん、資料にも述べられているような「いのちがかかわり合っている」ということも否定はできません。しかし仏教が言うところの「縁起」とは、そういうことではありません。ご縁の中に、自分も、相手も、浮かびあがってくる。そういうことをお釈迦さまは「無我」という言葉でも説かれています。そうでありながらも我々は、どうしても“わたし”という前提を立てて、その“わたし”が様々なものと関わっているのだと狭く考えてしまう。それで分断が起こるということを言いたいわけです。この話を理解したら分断が起こらないということにはならないでしょうが、少し違う方向性を感じていただけたらと思うのです。こういった仏の教えを理解してもらうことによって、少し軽くなるものがないかなというふうに思います。また資料に戻りましょう。

そうではない。つまり、いのちどうし、人間どうしが関係を持つのでなく、かかわりあいの網の目に浮かび上がっているものが、いのちであったり、人間であったりするのである。それが「縁起」ということであり、それ故に「無我」なのである、といくら力んで説明しても、それを客観的な事実として、私が外から眺めてしまうのである。愚かなことである。

(「ワタシタチハヒキサカレテイル」)

分かるということは、分からない人を排除するということです。聞法が進めば進むほど、仏法がありたくなるということもあると思います。そうすると「こんなにありがたい仏法をあの人は聞かない」「世の中の人全然分かってくれない」というところに立ってしまう。教えに出遇うと、逆にそういうことが起きることもある。本当は出遇ってからの方が大事なんです。出遇ってようやく聞法ができるようになる。そうして自分の底の無い煩悩に少しずつ下りていくことができるようになるだけです。

偉くなるわけでも、上に行くわけでもありません。仏法に出遇うことで、本当に下に下がっていく。しかし煩悩の深みに底はありませんから、どこまで行っても「ああ、煩悩だ、ごめんなさい」と煩悩の自分が見える。そうやって聞法が深まっていくんです。仏法に出遇って救われると聞くと、何か心が急に軽くなって、善い人間になるということを思うかもしれませんが、そんなことはありません。しかし、聞法してそういう自分自身を知ることによって、少し目の前の霧が晴れるようなことがあるんだと思います。

人間は何になってもいいんだ

新型コロナウイルスがきっかけとなって、様々な分断が表面化しました。「自分とあの人は意見が違う」ということでぶつかり、腹が立つこともあるでしょうが、怒らないで少し考えることは

できるんじゃないでしょうか。「これが正しい」と言っている自分の足元を見て考える。そして、自分とは異なる意見を言う人の足元がどうなっているのか考えてみる。そうして「我々は深いところで何かつながっていないだろうか」、そういう考え方ができるんじゃないかと思います。

私は浄土真宗とは、絶対の自由だと考えます。我々は世の中の流れに身を委ねて、そうして安心感を得ていることがあります。人間という存在自体が、そういうものとしてあるのでしょうか。しかし、私というものにかえった時に、決断ということをしなければいけない。でもそれは、自分で決めればいい、ということです。何に対しても、答えはありません。答えが無いから間違ったりもするかもしれないけれど、自分で決める。そして間違っていたら謝る。うまくいったならば「ありがとう」と言う。それだけかと言えばそれだけです。そういうものだと思います。

私の兄はお寺の後継者として、父親からいろいろな期待をされましたが、結局大学は全然関係の無い理系の大学に行きました。その後、大学に通えなくなり、京都の専修学院に行って大谷派教師の資格を取得しました。私もその時に京都にいたのですが、兄が急に変わったということがあったんですね。ある日、私のところに来て「俺は分かったぞ。人間は何になってもいいんだ」と。「だから俺はお寺さんをやるよ」と、そういう言い方をしました。「自分は自由なんだ。それで自分は寺が、浄土真宗というものが大切なものだと分かったから僧侶になるんだ」という決断だったと思います。人間的にはぐうたらな兄ですが、僧侶としては尊敬できる面があります。そういう「絶対の自由」が浄土真宗だなと思ったんです。

得度式を受けさせるということにも深くかかわることですが、お寺の後継者もそういう決断で決まっていたらいいという話になりますよね。自分で決めるということがない限りは苦しいままだと思います。「経済的に成り立つから後を継ぐんだ」という形でお寺を継ぐ人もいるでしょうが、それは大変つらいことになると思います。仕事は仕事として、仕事になるんですね。門徒さんのお宅でお参りしたり、葬儀や年忌をしたり法話をしたり、全部仕事としてです。だから「他で楽しいことを自分でしよう」ということになり、おそらく苦しい生き方になるだろうと想像します。

自分の周りはお坊さんばかりですから、見ていて分かります。お寺に生まれたからといって、浄土真宗の教えに出遇えるとは限りません。苦しうだなど思うこともあります。しかし真宗大谷派においては、こういった場所においても、教えを聞き、教えに出遇うことを一番大事にしている。このことは失われていないと思います。

しかし、真宗の教えを聞いていくと、聞くのが怖くなる時があります。それは「本当に自分というのは一人なんだ」と気付くからです。「人間同士がつながることはできない」というのが浄土真宗の教えだと考えます。だから我々は阿弥陀さまを通してつながるということでしょう。つまり「南無阿弥陀仏」を通した人間関係、「自分は愚かだ」というところでつながるということです。それ以外のつながり方を、浄土真宗は偽物だと教えてくださっていると思います。

本当に稀なこととして、直接、何となく分かり合うこともあると思います。しかしそれは、基本

的にお念仏によっているのだと考えるのが浄土真宗なのだと思います。人間同士がある瞬間に分かり合うこともあるでしょう。このことを否定はしません。それは直接つながっているのではなく、同じ方向を向いているということです。

以上のような、我々人間のあり方ということ、そして浄土真宗の教えということ念頭に置きながら、得度式についての話を聞いていただきたいわけです。

「得度」とは？

これから得度式の中身に入っていこうと思いますが、今日は二つの事柄に分けてお話ししようと考えています。一つは得度式とはどういうものか、ということ。これは儀式的構造に関することです。もう一つは教化ということについて、我々が相手を導くことができるのかという問題ですね。得度式を子どもに受けさせるということにも関わることです。この二点を考えたいと思っています。

まず、得度式の「得度」という言葉の意味について。これは「^{わた}度ることを得る」ということ、言い換えれば「彼岸に到る」「涅槃に到る」ということです。「彼岸」という言葉はもともとお釈迦さまの時代から使われている言葉で、古くは「向こう側」という意味で用いられていました。

有名なのは「向こうもこちらも全て捨てる、蛇が皮を脱ぐように」というお言葉ですね。我々は「向こう側に浄土があり、こちら側は迷いだ」と実体的に分けて考えます。先ほどお話ししたように、これが無明の構造です。お釈迦さまはそういうあり方を全部捨てるのが向こうに行く（彼岸・涅槃）ということなのだとされています。中には「それは大乘仏教の考え方だ」とおっしゃる方もいますが、初期の仏教の頃から、すでにそういうことは言われています。得度は「^{わた}度ることを得る」ですから、そのことが成就した、度ったということです。資料には経典の文章を二つ挙げました。

此等の天人師は彼岸に得度した。 （『長阿含経』『大本経』）

当来の世に経道滅尽せんに、我慈悲哀愍をもって特にこの経を留めて止住すること百歳せん。それ衆生ありてこの経に値う者は、意の所願に随いてみな得度すべし。 （『無量寿経』）
（未来に経や仏道が滅尽しても、私は慈悲とあわれみをもって、特にこの経を百年間、この世にとどめよう。この経に値ったものは、思いのままに得度できる。）

『長阿含経』『大本経』というのは、過去の仏たちのことを説く経典です。文中の「天人師」というのは、仏の別名です。過去にたくさんの仏さまがおられ、その仏さまは確かに彼岸に^{わた}度られた方々だということを説いています。そして次が『大無量寿経』の言葉です。この文章を見ますと、さとりに到る、もしくは涅槃に到ることを「得度」という言葉で説かれていることが分かります。

つまり、得度式というのは「度を得た式」ですから、さとりを得たという成就の形が示されているということなのです。我々はさとったわけではありませんが、そのさとりが成就されたとい

う形をとっているのです。

得度式の三帰依文は、

願従今身、尽未来際、帰依仏、帰依法、帰依僧。

(願わくは今より未来のはてまで仏法僧に帰依します。)

というものです。帰敬式の時も「人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く」と三帰依文を唱えます。聞けていないのに、聞いてしまっていると言うわけです。これがおかしいという人もおられますが、これから教えを聞こうと思って帰敬式を受けるわけです。同様に、これからさとりをいたろうと思うから僧侶になる得度式を受けるわけです。ここに答えが出ているんです。

僧侶という形をとるということは、お釈迦さまの弟子になるということです。でも本来は、お釈迦さまのおっしゃっていることが「ああ、そうだ」と分かって、それで弟子になるという順序でしょう。つまり、お釈迦さまの教えに頭が下がったものが弟子になった、ということが始まりだと思います。得度式、そして帰敬式という儀式は、その形をまねしているわけです。

聞法して教えが自分の中で深まってきて、それが得度式や帰敬式の受式という形で表れるということもあるでしょう。しかし、得度式や帰敬式というものに出遇って、そこから深まっていくというあり方もある。儀式はそういう一つの答えとして、形として、先に準備されているということなのです。

儀式という入り口

儀式という表現は「従果向因（果より因に向かう）」です。儀式というのは不思議ですよ、お参りをされている方々はお経の内容を理解していなくても、頭を下げて手を合わせて「南無阿弥陀仏」と称える。つまり、お経が分からなくても、きちんとお経をいただいたということを形で示しているわけです。お経を読んでいる方も同じですね、内容を分かっているなくても、読むことができる。儀式であるということはある意味では、言葉は悪いですが便利なところがあります。

僧侶が衣を着て本尊の前でお釈迦さまの言葉を読誦する。お参りする人はそれに対して手を合わせる。そういうことが形として行われているわけです。それは「果」であり、答えなんです。お釈迦さまの言われたことに頭が下がり手を合わせる、それは救いでしょう。儀式を通して、我々はその救いの形を表現しているわけです。

もう一つ言います。お念仏「南無阿弥陀仏」は阿弥陀さまに南無するということ、阿弥陀さまに帰依することです。それは阿弥陀さまに自分自身を照らされて、「自分は愚かでした」と本当に頭が下がることだと私は思っています。しかし、そういうことがなくても、子どもに「南無阿弥陀仏とお念仏するんだよ」と教えます。「分からなくても念仏を称えるものだ」、そういう教え方でも良いと思います。なぜなら、手を合わせて頭を下げるという、その形が答えだからです。

我々は本当に頭が下がるということはあるですか。あるといいのですが。頭を下げる、ではな

くて、頭が下がるんです。もし下がったとしても、次の瞬間には「そのことを分かった自分は偉い」となるのが我々です。だからこそ、本当に阿弥陀さまに頭が下がり、「自分は愚かだった」と分かることが救いなのです。

教えに出遇った人たちが作った救いの形を、我々がまねているということです。そうやってまねながら、阿弥陀如来の本願（仏の心）に触れていく。そうすることによって自分自身の姿が見え、本当に頭が下がるということが起きてくる。その入り口として、形から入っていくということがあります。これが儀式が「従果向因」であるということの意味です。

ですから「南無阿弥陀仏」は答えなんです。答えなので、何回称えたからといっても、それが功德になるわけではありません。宗派によっては「百万遍念仏をしたから善いことが起こる、功德になる」と言われます。身近な表現で言えば、そうやって念仏することでポイントが貯まるわけです。その時には念仏は原因（因）になっている。

しかし、浄土真宗の念仏は結果（果）です。救いそのものが形として、言葉として現れている。「言葉になってくださった仏さま」という言われ方もされます。だから親鸞聖人は「念仏は何回称えてもいい。一回でも十回でも、生涯ずっと称え続けてもいい」という言い方を『教行信証』の中でされています。それは今言ったように、念仏が結果（果）だからです。もし念仏が原因（因）だったなら、「善いことだからたくさん称えて積み重ねなさい」という話になります。それが「自力」ということです。

そう考えると、念仏というの、ある意味では儀式的な表現だと言えます。「南無阿弥陀仏」に触れていく入り口が、「南無阿弥陀仏」という言葉と形によって示されているわけです。

手を合わせる意味

儀式を行うことが功德となり、それでさとりを開くという考えの仏教もあります。けれども浄土真宗は、儀式もお念仏も、全て「果」であり、答えを示しているのだと説いていると思います。我々が答えをまねることによって、その世界に入っていくということが実際に行われているわけです。

先ほどの三歸依文もそうでしょう。「いますでに聞く」と、聞いたという形をとることによって自分がその歩みを始める。「まだ聞いてないけど聞くんだ。聞けた。ああ、そうか」となる。そうやって仏弟子になるわけです。でもこういった入り口が無ければ、そうはいかない。仏法が何か分からないのに仏弟子になることなんて無理でしょうし、さとりが何か分からないのに得度など不可能です。しかし儀式という形をとることによって、そういう我々の目に見える形をとることによって、入り口になってくださっている。

なぜそういったことが成り立つかと言えば、その儀式を支えるたくさんの人たちが周りにいるからです。儀式という入り口を通してその世界に入ることによって、いろんな人に出会い、そうして教えを聞いていくことができるようになっている。得度式を受けて終わりではなく、受けたと

いうところから、お念仏を信賴している人たちに出会い、その人たちが信じる世界に触れていくことができる。儀式をすることによって、その仲間入りをするという形ですね。そういった点から、儀式は「新たな誕生」という言い方で表現されることもあります。

例えば、得度式は電気を消して真っ暗な中、ろうソクの明かりだけで行われます。これは親鸞聖人が九歳の時に「明日ありと 思う心の あだ桜 夜半に嵐の 吹かぬものかは」と詠って夜中に得度したことが由来であると言われます。そういう伝承があるから今でも暗くして行うのだと説明される。しかしもう一つ意味があって、それは暗いところから明るいところへの再生、また生まれるということです。御影堂という大きなお母さんのお腹から、また新たに生まれ変わって出てくる、そういうイメージです。暗いところの中で「仏と法と僧伽に帰依する」と言い、おかみそりの儀式を受ける。そして明るいところへ出ていく、生まれ変わる。そういう意味では、儀式というのは、我々人間の煩悩に合わせた形、人間の表現に合わせた形なんですね。

そもそも、手を合わせる・頭を下げるという形（動作）自体は、仏の教えとは全く関係の無いものです。手を合わすことも頭を下げることも、インドでは「ナマスティー」と言います。これはインドの挨拶で、「ナマスティー」というのは「あなたに帰命します」という意味です。だから、お釈迦さまに出会った人は手を合わせて頭を下げるという挨拶をした後、座って聞法を始めたのです。他にも、経典にはインドの挨拶の形がたくさん出てきます。「長跪合掌」というのは、膝立ちになって座って合掌するという挨拶。「接足作礼」は相手の足を持って自分の頭につける挨拶。今でもインドの人は挨拶する時に足に触ったりしますね。他にも尊敬の挨拶の形は経典に出てきますが、そういった挨拶をした後、一面に座って仏の教えを聞いたと経典には書かれています。

つまり、我々はそういった経典に見られる仏弟子の姿をなぞっているんです。だからインドの挨拶をまねする形になっているのです。ただの挨拶と言えは挨拶なのですが、挨拶の後でお釈迦さまの教えを聞く。そういうことをまねして我々は合掌するようになったのです。手を合わせる・頭を下げるなど、そういった形は全て、我々人間が持っている表現です。その我々の持っている形を最大に利用して、仏さまは向こうから表現となって表れてくださっているというふうにいただけたらいいわけです。

こういうふうにいただくことができれば「還相回向」と言えると思います。仏さまのはたらきがこちらに来ている。仏さまが我々人間に分かる形となって表れ、そして我々を誘引してくださっている。このように儀式をいただけたらいいなと考えています。

仏が法を説く理由

次に教化ということについて。大人が子どもに得度式を受けさせるということは教化だと考えていいのか悪いのか。それとも、そういうふう考えること自体おかしいのか。そういったことを確かめてみたいと思います。

古い仏伝には「梵天勧請」という有名なお話が説かれています。大まかに内容を言いますと、

お釈迦さまはさとりを開かれた後、「こんな話を世の中にしても誰も分かってくれないだろう」と思い説法を躊躇した。その時に世の中の代表である梵天という神さまが「教えを求めている人たちのためにも説法してください」と、お釈迦さまに勧め請うた。つまり説法をお願いしたということです。そういう有名なエピソードなのですが、この話から教化ということを考えてみたいと思うわけです。

お釈迦さまはさとりを開かれてから一週間ごとにいろんな木の下に座って、瞑想を続けたと言われています。資料をご覧ください。

世尊はニャグロード樹のもとへ行き、その根元に安座し、世間について思いをいたした。「私が目覚めたこの法は、深遠、完全、微妙、難解で、論理の境界（対象）ではなく、智者に知られ、一切の世間と適合しない。執着の対象を喜び、執着の対象に快樂をおぼえ、執着の対象に飲んでいるこの世の人々は、執着の対象を喜び、執着の対象に快樂をおぼえ、執着の対象に飲んでいる故に、この「これを因・縁として有る」という縁起の道理、一切の生存の因の棄捨、過去の行を静めることによる一切法の断、渴愛の滅尽、貪愛からの離、滅、涅槃は見がたい。

（『大事』Ⅲ 三一四頁）

文中の「生存」というのは、「自分がいる」ということです。そういうものの原因を「棄捨」する。そして「過去の行」というのは、人間を人間たらしめている広い意味での文化的な背景です。そういうことも捨てる。「渴愛」というのは、渴くように「自分はこういうものでありたい」という思い、それも「滅尽」させる。そういうことをお釈迦さまは説きたいのですが、世の中の人はいくつかのことを話しても全く理解できない。また資料の続きをご覧ください。

そして私はその人々には説かない。彼らは理解できない。それ（説くこと）は私にとって徒勞である。それ故、私は一人、沈黙して森林に住していよう。

その時、次の詩頌が世尊に現れてきた。

流れに逆らってゆく私の道は甚深であり、見難い。／貪りに愛着している者たちは、見ることはできない。今、説くな。／苦勞して私が得たものである。今、説くな。／欲望にのみこまれて人々は、流れのままに運ばれている。

（『大事』Ⅲ 三一四頁）

これは『大事』という古い經典の文章です。このようにお釈迦さまは自分がおさとりを開いた法は、一般の人に話しても絶対に分かってもらえないだろうと思い、説法をやめようとした話が書かれています。

もう一つ、別の資料をご覧ください。これは梵天の勧請があった後に、釈尊が世の中を見た時のことが説かれているものです。

釈尊の説法の躊躇を知った梵天は、釈尊のもとを訪れて説法を願う。それに対して世尊はさとりの智慧をもって世間の全てのものを観察し、その中に三種類の人を見た。

そのとき世尊に次のような考えが浮かんだ。「私が法を説いても説かなくても、過りに囚われている者達は、この法を理解できない。私が法を説いても説かなくても、解脱が決まってい

る者達は、この法が説かれれば、理解するだろう。①まだ決定していない者達は、もしその法を私が説けば理解するだろうし、説かなければ理解できないことになるだろう。」と。

（『大事』Ⅲ 三一八～三一九頁）

お釈迦さまは「まだ決定していない者達」、もしかしたら私が話したら分かる人があるかもしれない、と思った。そういう人に対して話そうと思ったわけです。しかし、お釈迦さまもハッキリとおっしゃっていますね。話をしても、分からない人は分からない。分かる人は、話をしてもしなくても分かっている。こういった人々のことを經典では後々、正定聚、邪定聚、不定聚という言葉で説かれることもあります。

ではまた資料の続きに戻りたいと思います。

そこで世尊はいまだ決定していない者達について、またマガダ国の婆羅門や在家の人々の間で生じていた先に述べた ②邪悪で、不善なる異端説に気付き、また ③偉大なる梵天の勧請も知り、④七阿僧祇劫にわたってなされつづけてきた自らの誓願に気付き、衆生への大慈が浮かんだ。そして、彼に近づいてきた偉大なる神々の王たちや、世間の支配者たちが、聖なる法輪を転じることを勧請した。そこで世尊は梵天の法輪を転じて欲しいという懇請を聞き入れた。

（『大事』Ⅲ 三一八～三一九頁）

ですから、線を引いた部分を見ると分かるように、お釈迦さまが説法する理由が四つ述べられています。一つ目は、まだ決定していない者たちならば法を説けば分かるだろうということ。二つ目は、お釈迦様がマガダ国に広まっていた邪悪で不善なる異端説に気付いたこと。三つ目は、偉大なる梵天から「説法してください」とお願いされたこと。そして四つ目は、お釈迦さまご自身の願いということです。

お釈迦さまの誓願

説法した理由をもう少し詳しく見ていきたいと思います。二つ目の「邪悪で、不善なる異端説」ということですが、お釈迦さまがさとりを開かれた頃、マガダ国のバラモンや在家の人々の間で「風が吹かなくなる、河が流れなくなるということなどが起こり、世間が全て闇にとざされる」というような話が広がっていたのです。具体的に何が起こっていたのかは分かりませんが、その社会の人は大変な不安の中を生きていたということでしょう。お釈迦さまは、人々が大きな不安を抱えながら生きていることに気付かれた、ということですね。

そして四つ目の「七阿僧祇劫にわたってなされつづけてきた自らの誓願」ですが、これはお釈迦さまご自身の本願です。当時のインドは、生まれ変わりということを前提に物語が述べられます。ですから、お釈迦さまは不退転（仏に成ることが決定している位）に入ってから、何度も何度も生まれ変わって仏に仕えて、そうして師の仏に自分の誓願を述べます。仏に仕えるたびに「私も、私を救ってくださった仏のように成りたい」と本願を立てられるのです。

『大無量寿経』で言えば、「嘆仏偈」の部分がまさにこれに当たります。法蔵菩薩が師である世

自在王仏を「光顔巍巍」と讃えながら、最後は「我行精進 忍終不悔」、つまり「私はどんなことがあってもこの道を全うします。私が救われたようにみんなを救いたい」というような言葉で締めくくられます。

こういった願いが、先ほどのお釈迦さまの「自らの誓願」という言葉で表されたものです。全ての仏が共通して立てられるものなので「総願」とも言われます。そういった願いが各仏において異なって展開されたものを「別願」と言います。阿弥陀如来が仏に成るにあたって立てられた四十八の願いが別願ですね。いろいろな仏によって、それぞれ異なる願いが立てられているわけです。本願の「本」とは元々は「過去の」という意味ですが、「根本の」という解釈も後にされるようになってきました。お釈迦さまはこういった、ご自身の本願を思い起こして「ああそうだった、私はこのために生きてきたんだ」と気づき、そうして経典では「衆生への大慈が浮かんだ」と続きます。もう少し資料の続きを読みたいと思います。

その時世尊は梵天に次の様に偈で告げた。私は不死の門を開いた、梵天よ。世尊に聞こうと欲う者は、害ある想による信を捨てよ。既にマガダ国にひろがっている不浄なる法は、害ある想によっている。

(『大事』Ⅲ 三一八～三一九頁)

これはお釈迦さまの説法の内容ですね。「私は不死の門を開いた」とありますが、それはつまり仏法に出遇ったものは死なないということです。それはなぜか、「無我」だからです。「無我」ということは、“わたし”というものは一瞬一瞬ごとに違うものだということです。“わたし”を“わたし”たらしめているご縁が無くなることを、人間は「死」と言います。しかしそのことを様々なご縁という別の角度から見ると、別の形になったというだけです。様々なご縁によってたまたま“わたし”といういのちが泡のように浮かんでいただけなのです。だから何も生まれていません。何も生まれてないから、何も死なないのです。これが仏教の基本的な考え方です。今の自分と次の瞬間の自分は違う自分だとはっきり考えるということです。

我々には記憶というものがありますから続いているように考えるわけですが、三歳の自分と今の自分は全く別のものです。遺伝子というものがありますから、形態は似たようなものになるかもしれませんが、意見や考え、一緒に生きている相手、周りの人も変わる。善と悪ということなども、いろいろ身につけるようになる。それは全然違う自分になっているということでしょう。

映画などで記憶を変えられた人の話があると「自分というものは一体何なんだ」ということが出てきます。仏教の考えで言えば、今が“わたし”なんです。過去のあり方から帰結したご縁が今の自分になっている。この自分もまた変わっていく、どうなっていくかは分からないことです。そして「不浄なる法は、害ある想によっている」ということです。善があるから悪がある、喜びがあるから不安がある。これが「害ある想」ということです。つまり、我々のものの捉え方です。善というものを持っているからこそ、それが脅かされると不安という形で表れてくる。お釈迦さまは「そういった分別の構造が、生きるということに対して立ちほだかるものとなっている。そのことをよく知りなさい」とおっしゃっている。そのうえで、教えを聞きなさいということです。

「伝える」と「伝わる」

お釈迦さまは、ご自身がさとられた真実は人々に伝えることができないと一旦考えた。「こんな難しいことは、いくら真実だと言っても分からないだろう」ということです。このことを得度式に当てはめて考えてみるとどうでしょうかね。「仏法なんて子どもに言っても分からない。それなのに得度させるのはどうか」というような話になるかもしれません。そのあたりはご自分でいろいろ当てはめて考えていただければと思いますが、注目したいのは、お釈迦さまが考え直したということです。

資料のところで、お釈迦さまが過去に立てた「自らの誓願」について見ました。「過去、自分は教えに出遇うことによって救われたという事実がある。だから自分も仏に成りたい」ということをおっしゃっている。自分に届いたのだから、他の人にも真実は届くはずだということです。つまり最初「他の人々には伝わらないだろう」と考えたということは、お釈迦さまは真実というものを疑ったのだと思います。しかしご自分が救われたというところに立ち戻って、「私が伝えるということならば無理だ。真実が私に伝わったのならば、ほかの人にも伝わるのではないか」、そういう感覚を取り戻したのだと思います。真実は「伝える」ものではなく、「伝わる」ものだということです。

始めの方に話したことでありますが、人間は自分が「分かる」ことにより、「あの人は分かっている」ということになりやすいものです。それで「分からせるのは難しい」という話になっていくわけです。

我々は真実や信心といったものに出遇うと「それを伝えなくてはならない」と、肩ひじを張ったりするようになります。でもそれはあなたのフィルターを通して、あなたが真実としていただいたということです。「分かる」とはそういうことです。一瞬照らされてハッと思うのですが、そのすぐ後には「俺は分かったぞ」という形で私有化していきます。そのように自分が分かったものを他人にどう伝えるか、と考えるならば、「これは非常に難しい」ということになるわけです。しかしそうではなく、「私が照らされたのだから、他の人も照らされるだろう」ということです。

親鸞聖人は『教行信証』「信巻」で、阿闍世が救われたことに注目しておられます。親を殺すような、お釈迦さまを傷つけるような、そういった救われない者が救われた。その救われない者に、親鸞聖人はご自身を見ておられる。そのうえで、「どこまでも救われない自分が救われたのだから、他の人も救われる」という表現をとられていると思います。私が救う側に立たない、ずっと救われる側にいるということです。

ですから、浄土真宗の救いとは、救う者になることではありません。自分が救われる者になることによって、その救われている姿が阿弥陀というものを証明するのです。でもそれは、私が阿弥陀を証明するというものではありません。私が救われているところにはたらいっている力を、阿弥陀というのです。

これも「縁起」ということです。阿弥陀さまがどこかにいて、私はここにいるということではありません。阿弥陀さまに出会う、その時には私の下がらない頭が下がっている。それが阿弥陀さまがいるということです。私が「南無阿弥陀仏の私」になるんです。そのように、私が救われているという表現が、阿弥陀さまがいらっしゃるということを表現するのです。どこかに実体的に阿弥陀さまがいるわけではありません。自分が救われたという表現によって、真実が伝わる。そのことを通して、いただけてくださる人もいますということです。

だから「教化」というのは、自分が分からせようということではありません。阿弥陀如来、真実、真如、法性からのはたらきかけです。我々は「自分は正しい」という誤ったあり方が中心であり、そして「わたし」というものがある」ということを抱えています。それらは常に閉じよう閉じようとする方向性を持っています。

しかし、真実は開いています。だからそこには、不安や違和感というものがいつも付きまといている。そうやって自分の中ではたらいっているのだと思います。不安とか苦しみというものが、実は真実からのはたらきかけであったというふうにいただくことができるのが仏教であり、浄土真宗だと思います。「自覚」とはそういうことですね。自分で自分を苦しめていることを知るということです。それが救いなんです。

どうしても苦しみが無くなるのが救いだと思ってしまいがちですが、自分で自分を苦しめているということを知ることは、肩の荷が下りることなんです。「ああ、自分は愚かだった」と頭が下がる。それは喜びであると同時に、今までの自分に対する悲しみでもある、両方あると思います。親鸞聖人は必ず、遇法のよろこびと懺悔との両方を一緒に言われます。「悲歎述懐」と言われますが、それができるといことが、法に出遇ったというよろこびの表現なのです。そういう形でなければ、阿弥陀さまがいらっしゃるということが表現できないのだと思います。

「教化者意識」は無くならない

今日はずっと、私に対する向こうからのはたらきかけということを書いてきました。「還相回向」という言葉で表されるものです。それは常にあるのですが、常にあると言うと、実体的に存在するように見えてしまう。でもそれはやはり、自分が出遇った時にだけあるんですね。出遇ってみるといつでもあると気が付く、そういうものでしょう。それは「ああ、自分は愚かだ。南無阿弥陀仏」ということを繰り返すことができるようになるということです。自分は阿弥陀さまに照らされているのだということをそのまま表現していく、自分がいただいたことを表現していく、ということでもあります。そういうことが浄土真宗の信心であり、教化を受けるということです。

だから「私があなたに何かを伝えたい」となると、やはりそれは「教化者意識」なんです、分かって欲しいわけだから。分かって欲しいというのも煩悩です。菩薩十地の中で最後に残る煩悩は、人を救いたいという煩悩なのだとされます。そういうものがある限り、菩薩も自在には

たらないというわけです。だから我々には無くならないのです。

「教化者意識を無くしていくのが課題です」と言うてはいけません。それは一生無くならないものです。そして、教化者意識を無くしていくことが仏道の歩みであると思てはいけません。それは錯覚です。繰り返しますが、教化者意識というものは煩悩であり、無くならないものなのです。しかし、教化者意識があるから話ができるということもあります。

私がこうやって話している中にもやはり、「みんなに分かって欲しい」という煩悩があります。自分が正しいと思ていることを話すのだから、「自分は正しい」と思ふ煩悩もあるわけです。そして「あの意見は違う」と批判する時には、「あれは違う」と思ふ煩悩があるわけです。「それは教化者意識でしょう」と言われたら、「違います」とは言えない。だから教化者意識は無くならないと知って、お話をしていく。自分のいただいたものを表現していく。

ですから、こうやって皆さんにお話をするということは、どうしたって「上から目線」という形になってしまうんですね。「分かって欲しい」という、上からお話しする形です。だから「同じ目線で」という言葉も聞きますが、そういうことは我々には基本的に無いことだと思ていなくてはいけません。

「子どもと同じ目線に立たなければいけない」「目線を下げる必要がある」、そういったことも耳にします。それはとても大事なことです。子どもと一緒にいるなら、上から立ってものを言うよりも、やはりしゃがんだうえで一緒に話をしたほうが良いでしょう。子どもが泣いている時には「どうしたの?」と言って、しゃがんで相手の顔を見て話をする。これは当たり前のことだと思います。しかし「目線を下げなければいけない」ということが教条的になったならば、そこには違和感が生じるんですね。

自然にそういう行動をすることもあるでしょう。子どもと過ごすうえで、そういうことはテクニックとして必要なのかもしれません。しかし基本的にそれは「私が下げているんだ」というものであり、自分が上ということは抜けないんだということを知っておかなければいけないでしょう。そして、仏からすればみんな同じ凡夫なのだから、知っておかなくてはいけないわけです。

得度を“させる”ということ

我が子に得度式を受けさせるということについては賛否両論あるでしょう。しかし、堂々と受けさせられない理由の一つとして、自分自身が浄土真宗に対して自信が無いということが考えられます。そして、強制させたら逃げていくのではないかという不安ですね。こういったものがあると思います。

しかし、受ける方も、受けさせる方も、どちらも同じ凡夫なのだから、「受けなさい」と言って受けさせた後は「捨ててもいいよ」と言うべきだと私は常々申し上げています。捨てる自由があることを教えるということです。それはなぜか。それは教化は自分がするものでもさせるもので

もなく、真実の教化なのだから「あなたが真実だと思えないなら捨てていいよ」ということだと思います。受けさせたうえで、相手に任せるということです。

私は「得度までは親の責任」だといつも言っています。年齢を重ねてからでは、そういう形をまねるのが難しくなります。「得度はそんなに軽いものなのか」と批判をされたこともあります、入り口になることが大事だと私は思っています。

もちろん、難しい問題もあります。得度式を受けさせられ、それに縛られる子どももいるでしょう。しかし、その苦勞も子どもの人生になっていきます。親御さんの中には「自分はお寺を継げとは一言も言っていない」と言われる方もいますが、態度で示しているわけですよ。それが子どもにとってはプレッシャーになったりします。

「無理やりさせなくても、自分で選ばせたら」という意見もありますが、それは一生無理だと思います。お寺で生活し、お寺と近い距離にいますから、周りの人のおかげということも含めて、自分で得度を選ぶということもあるかもしれません。でもそれは運がよくて、そして卑怯なことだと思います。自分が大事なことだと思うならば、得度までは親がさせてもいいわけでしょう。何も言わず態度で示したり、周りの人に任せるといような卑怯なことはしないで。どちらも同じ凡夫というところで「自分が大切だと思ったから受けさせた」という一言を言って欲しいと思います。そのうえで「あなたが大切だと思えないなら捨ててくれ」と。そういう関係がいいと私は思っています。もちろん、受けさせた後で自分がいただいた仏法を伝えていってもいいわけです。

あともう一つ、子どもは親の姿をよく見ていますから、親が僧侶をしているということを嫌がっていれば子どもは同じことを選ばないと思います。そういうことは正直だと思います。親が大切にしている事であれば、子どもはそのことをちゃんと見ていると思います。

仏法の話をしてきて、最後は急に世の中の知恵みたいな話になってしまいましたが、私はいつもそのようにお話ししています。親が大事だと思わなければ、子どもは同じものを選ぼうとは思わないでしょう。もし大事だと思うならば得度をさせて、後は捨てることも含めて自由に任せる。

「見ててもらう」という世界じゃないかなと思っています。教化は私がするのではなくて阿弥陀さまがする、そこを考えなくてはいけないと思います。